

## 第2学年B組 道徳科学習指導案

授業者 佐藤 咲紀  
研究協力者 成田龍一朗

- 1 主題名 だれにたいしても 【C (11) 公正、公平、社会正義】  
教材名「雨ふり」(光村図書)

2 子どもと主題

(1) 子どもについて

これまでの道徳科の学習においては、役割演技を用いることで登場人物の気持ちに共感し、自分だったらどうするのかと自分事として考えることができている姿が見られた。登場人物になりきって演じながら、それぞれの思いに寄り添って物事を考えることができる子どもたちである。

しかし、学級では友達同士でのトラブルが度々起きる。「叩かれた」「叩いていない」と主張が食い違ったとき、「叩いたつもりはなかったけれど、もしどつからいたらごめんね」と言う勇気、そんな折り合いを付ける謝り方があることを学んでいるところである。中には、頻繁に友達と対立してしまう子どももいるが、教師の力を借りつつ、仲直りのスキルを身に付けようとしている。また、仲のよい友達と苦手な友達で対応を変えてしまい、トラブルに発展してしまう子どももいる。誰に対しても分け隔てなく接し、お互いに気持ちよく過ごすと心掛ける子どもたちの姿を目指したい。

(2) 主題について

人はつい、自分の好き嫌いにとらわれてしまったり、偏ったものの見方や考え方をしてしまったりすることがある。私心にとらわれず、誰に対しても分け隔てなく接し、偏ったものの見方や考え方方に陥らないように努めることが、公正、公平な姿勢や態度につながっていく。特にこの時期の子どもは、自己中心的な考え方をしがちであるため、見たことや感じたことをそのまま言動に表す素直さがあり、それゆえ人を傷つけてしまうことがある。

本教材「雨ふり」では、主人公のふみおが傘をさしているところ、傘を持っていないのりことひろみが入れてほしいと走ってきて、仲がよくないひろみを入れるべきか悩み、のりこは自分だけなら入れてもらわなくていいとひろみと共に走っていく。そして、残されたふみおがはっとする場面で終わる。

登場人物のそれぞれの立場から考えることを通して、お互いが気持ちよく過ごすために大切なことについて考えを深め、これから的生活に生かしていけるようにしたい。

(3) 指導について

本主題では、仲良しの友達だけを傘に入れようとして断られ、はつとしたふみおの気付きについての話合いを通して、【公正、公平、社会正義】の道徳的価値の理解の幅を広げるとともに、**自己の生き方を見つめ直し、よりよい生き方を目指していこうとする道徳性を高めていく。**

授業デザインの具体的な取組一つ目との関連から、主発問で演劇的な手法を活用した活動を取り入れ、テーマについて主体的に考えができるようにする。これまでの子どもたちの実態から、登場人物それぞれが置かれた状況に没入できるように、登場人物になりきる役割演技（ロールプレイ）の場を設ける。そして、ふみおはその後どのような行動を取ったのか、自分ならどうするか、言動を即興的に演じながら考える時間を設ける。

また、授業デザインの具体的な取組二つ目との関連から、不公平な態度をとってしまったふみおの思いに共感する考えを認めつつ、のりことひろみそれぞれの気持ちについて多様な道徳的価値に触れた考え方を全体で共有していく。対話を通して多様な感じ方や考え方があることに気付き、誰に対しても同じように関わることの大切さについて考えを深めることができるだろう。

さらに、授業デザインの具体的な取組三つ目との関連から、教師も登場人物になって演じ（ティーチャー・イン・ロール）、話合いの焦点を絞ったり、逆に異なる視点を与えたりする。子どもが登場人物に自我関与し、自身の生活経験に基づいた演技をすることで、ねらいとする道徳的価値についてより自分事として捉えることができると考える。

### 3 本時の実際（1／1）

(1) ねらい 仲のよい友達だけを傘に入れようとして断られ、はつとしたふみおの気付きに着目し、不公平な態度を取られた相手の気持ちについて話し合うことを通して、好き嫌いにとらわれず、誰に対しても公正、公平に接しようとする心情を高める。

#### (2) 展開

○自律的に学習を進めるための支援

時間	学習活動	教師の支援	評価
3分	① アンケートの結果を見て、今の自分に気付く。	・誰に対しても好き嫌いにとらわれずに接することができているか、今の自分を見つめることができるように、事前アンケートの結果を共有する。	
20分	② 「雨ふり」を読んで、登場人物3人の行動や気持ちについて話し合う。	○登場人物3人それぞれの置かれた状況に没入し、ねらいとする道徳的価値についてより自分事として考えができるよう、誰の目線から述べたいか表現できる3色のカードを配付する。  ・ふみおに自我関与することができるよう、ふみおの気持ちに共感する考えも共有する。	
「入れて。」と言われたとき、ふみおはどんなことを考えただろう。			
子どもの反応（キーワード）		道徳的価値	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・のりこは仲がいいからいいけれど、ひろみは仲がよくないからいやだ。（好き嫌い・不公平・差別・区別）</li> <li>・この傘に3人入ろうすると、自分の肩も雨に濡れてしまうからいやだ。（自己中心的・助け合い）</li> <li>・でも、どっちもだめとは言っていない。少し思いやりはある。1人しか選べないから、仕方がない。</li> </ul>		<p>【公平】の欠如 【正直】 【友情、信頼】の欠如 【親切、思いやり】 【公平】の欠如</p>	
ふみおはなぜ、はつとしたのだろう。（どんなことに気付いたか）			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・仲がよくないからといってひろみに対して悪いことを言ってしまった。よくなかった。（不公平の自覚）</li> <li>・ひろみとのりこ、どちらにも嫌な気持ちにさせてしまった。謝りたい。</li> </ul>		<p>【公平】 【親切、思いやり】</p>	
ひろみ…なんで私だけだめなの？ちょっと悲しい。 のりこ…自分だけ入れてもらうのは寂しい。かわいそう。気まずい。 ひろみと一緒にがいい。			
15分	③ ふみおはその後どのような行動を取ったのか、役割演技しながら考える。	○誰に対しても公平な気持ちをもつ大切さについて実感を伴って考えることができるよう、ひろみとのりこが屋根の下で雨宿りをしているところにふみおが追いかける場面での役割演技を取り入れる。	
7分	④ 振り返りをする。	・話し合ったことを自分事として捉え直すことができるよう、本時で学んだことやこれから的生活で生かしたいと思うことをポートフォリオに記入する時間を設定する。	
好き嫌いにとらわれず、誰に対しても公正、公平に接しようとする心情を高めている。 (発言・ポートフォリオ)			

# 令和7年度 道徳科実践・研究計画

部 員

○米山小幸、猿田千穂子、佐藤咲紀、鎌田佳佑、永須千尋、三浦茉子

## 1 昨年度の成果と課題

昨年度の実践を通して、道徳科における自律した学習者の姿が見えてきた。

- ① 2年「ぐみの木と小とり」の実践では、嵐を前にぐみの実をりすに届けに行こうとする気持ちと行きたくない気持ちとの間で葛藤する小とりになり切る役割演技を取り入れた。その際、この場面の小とりが置かれた状況により没入できるよう、「嵐のトンネル」を用いることにした。教室の真ん中を飛ぶ小とり役の子どもに向かって、両隣に座る子どもたちが声や身振りで嵐を表現し、小とりの葛藤を促す仕掛けである。この嵐のトンネルを前に、考え込む様子の小とり役の子どもも、いざ飛び立った後も体を低くし、まるで強い雨を避けるかのように速く走って行った子どもの姿が見られた。この演劇的手法を通して、葛藤が促され、小とりの心情に深く入り込んでいたと言えるのではないか。教材の中で子どもが最も葛藤する場面はどこなのか、そしてその場面の登場人物によりなり切るために、どのような演劇的手法の活用が考えられるか、今後の授業研究へのヒントを得た実践であったと考える。
- ② 前述した2年生の実践では、「親切」がテーマとなっている教材を扱った。だが、「親切」と言っても、どの立場に立つかによって、多様な捉えができる内容項目である。「小とりさんはぐみの木さんにありがとうと言いたかったと思う」と発言した子どもは、小とりがぐみの木への感謝の気持ちからりすに親切にしたという考えだ。「お礼に」という言葉も子どもたちから聞かれた。りすにぐみの実を届け終えた小とり役の子どもに、「嵐が止んでからでもよかったです。風邪ひくよ。」と揺さぶりを掛けた教師に対し、「一秒でも早く楽にしたい」と返す子どもの発言からは、りすの体を思いやる気持ちが親切な行動を促したという考えがうかがえる。本実践の役割演技には登場しなかったが、ぐみの木の視点では、りすへの友情の気持ちが親切に結び付けていることを示す反応が子どもたちから出てくることも予想される。このように、子どもたちが心から納得する道徳的価値観を見いだすことができるよう、複数の立場から価値項目について考え、それを共有していく授業づくりが重要であると考える。
- ③ 3年次までに、一つの教材でも、子どもは道徳的価値を多様に捉えるということを実感してきた。そして演劇的手法によって引き出された子どもたちの本音の中に、教師の想定にない道徳的価値が見られたときの対応に依然として課題が残った。授業で扱う教材について、教師が道徳的価値の捉えの幅を広げ、深めることが欠かせない。そうすることで、子どもたちの本質に迫る発言や深めたい発言を逃さず、大切に扱うことができると考える。また効果的な切り返しの発問を想定することにもつながる。3年次までの成果を生かした教材研究を継続し、子どもたちが道徳的価値に対する考え方を深められる授業づくりを今後も目指したい。
- こうした成果と課題を踏まえ、道徳科における自律した学習者の姿を次のように捉える。また、自律した学習者が育つ授業デザインの具体的な取組を次のように設定する。

## 2 道徳科における自律した学習者の姿

- ① 教材の登場人物が置かれた状況に没入する姿  
② 自らが納得する道徳的価値観を見いだす姿  
③ 自らの道徳的価値の捉えの幅を広げたり、深めたりする姿

## 3 授業デザインの具体的な取組

- 登場人物になりきる演劇的手法の活用の仕方や活用する場面を工夫する。  
○複数の立場から内容項目について考え、共有していく活動を設定する。  
○子どもたちの本質に迫る発言や深めたい発言を大切に扱い、効果的な切り返しの発問をする。